校長室だより　１１月

2024（令和6）年11月1日
大阪市立天王寺小学校
校 長　藤 原 和 彦

オ リ ー ブ の 木

天王寺小学校の校庭には、都会の真ん中の学校にしては珍しく、たくさんの樹木があります。どこの学校にも桜や梅の木はよくありますが、柿やみかんやプラムや洋梨の木もあり、毎年実をつけています。そうした実のなる木々の中に、オリーブの木があるのをご存じでしょうか。場所は、給食室前の運動場に埋めてあるタイヤ遊具のところです。

実は、私が3年前に天王寺小学校に来た時は、オリーブの木があることを知りませんでした。なぜなら、当時のオリーブの木は、枝を剪定（せんてい）されて、木全体がこんもりと丸い形に整えられていたからです。その形は、まるで北海道のゆるキャラ「まりもっこり」のような感じでした。ある時、その木がオリーブだと教えてもらったのですが、木全体の形だけでなく、ツヤのある濃い緑色の葉っぱを見て、それがオリーブだとは全く思えませんでした。

そこで、剪定せずにそのまま枝を伸ばしてみようということで、しばらく放ったらかしにしていました。すると、丸く整えられた木の隙間（すきま）から、だんだんと緑の葉をつけた枝が伸びてくるではありませんか。色は鮮やかだけれども裏側がツヤのない葉っぱや枝ぶりは、やはりオリーブでした。しかし、ある日、市の営繕（えいぜん）班の方々が校内樹木の剪定作業をしてくださった時に、伸びた枝をバッサリ切ってしまい、また元通りのまりもっこり状態になってしまったのです。

そこで、翌年も剪定しないことに再挑戦。自分で勝手に名付けた「オリーブ伸び放題プロジェクト」のもと、オリーブの木は、好き放題に枝を伸ばし始めました。そして、2年目のこの秋、ついにオリーブの木はその枝に小さな実をつけたのです。まあ、オリーブが実をつけたからと言って、別にそれをどうこうするわけではありませんが、実のなる木に実がなるという当たり前の光景が見られて、何だかうれしく思いました。

本来、オリーブは実のなる樹木です。しかし、人がその前に手を入れて形を変えてしまったおかげで、本当の姿から遠いものになってしまいました。そこで、ちょっと考えました。もし、これが子どもだったらどうでしょう。子どもが成長する前に、大人があれこれと手を加えることで、その子本来の姿から遠ざけてしまっていることはないでしょうか。例えば、子どもは、失敗して気づくこともあるはずですが、そうならないように大人がいろいろと介入してしまうことで、せっかくの成長のチャンスを逃してしまっていることがあるかもしれません。また、大人が良かれと思って子どもにあれもこれもとしてしまう中には、本人にとってはマイナスになってしまうものがあるかもしれません。

では、逆に何もせず放ったらかしにしていれば良いかというと、そんなことはありません。オリーブの木だって、適切な時期に剪定を行わないと、成長できないそうです。それと同じように、本当に子どもに必要な支援を適切なタイミングで行っていくことで、子どもは自分の実をしっかりと実らせることができるのではないでしょうか。実際には、なかなか難しいことですが…。

現在のオリーブの木は、全体の丸い形から方々に突き出した枝が重なり、何とも不格好です。でも、その姿が、本当の自分を取り戻そうとしているように見えて、いじらしく見えてしまいます。その様子を見ながら、今年オリーブが実をつけたように、子どもたちも、いつか自分らしい実を実らせてほしいなあと思いました。

修学旅行のよい話

先月上旬に、6年生と三重県の伊勢志摩へ学旅行に行ってきました。今年は2日目が雨に降られてしまい、ちょっと残念でしたが、お天気の悪さを吹き飛ばすような子どもたちの笑顔のおかげで、楽しく2日間を過ごすことができました。

天王寺小学校の修学旅行は、これまでずっと伊勢方面に行っています。校長室に残る古い卒業アルバムを見ても、昭和の頃から伊勢神宮や二見の夫婦岩が写っているので、随分昔から行先は変わっていないようです。最近は、より学びを重視したり体験的な活動をしたりするために目的地を変更する学校もあるようですが、小学校の修学旅行は、何を学ぶかということと同じくらい、子どもたちが思い出を作るためにどう取り組むかが大切だと思っているので、当面は今のままでも良いのかなと思っています。

ところで、今回の修学旅行の出発式で、私は6年生に「この旅行は、いろいろな人の支えで成り立っています。だから、出会いを大切にして欲しいと思います。」と話しました。すると、どの子もきちんとバスの運転手さんや、旅館の方々にしっかり挨拶をしてくれました。当たり前の行動と言えばそれまでですが、実際見ていると、とても気持ちの良いものです。さらに、夕食のお世話をしていただいた旅館の方から、「この秋来られた学校の中で（行儀の良さが）一番ですね。」とお褒めの言葉までいただき、ちょっと鼻高々になりました。

もちろん、旅先でのこうした態度は、出がけに校長が一言言ったからできるというものではありません。毎日の学校での指導や、ご家庭や学園での躾があってのことだと思います。「躾」という字は「身」を「美」しくと書きますが、日本で作られた国字です。それくらい日本には礼節を重んじる文化があるのです。言葉遣いや所作が美しい人は、きっと心も美しい人だと思います。この旅行で、天王寺小学校の子どもたちが、そうした人に一歩近づいたような気がして嬉しくなりました。

今年、子どもたちに、当たり前のことをきちんとできるようにと言ってきましたが、それを目の前で見せてくれた修学旅行は、とても心地よい旅となりました。この伝統をこれからも受け継いでほしいと願っています。